

骨董集上編下巻

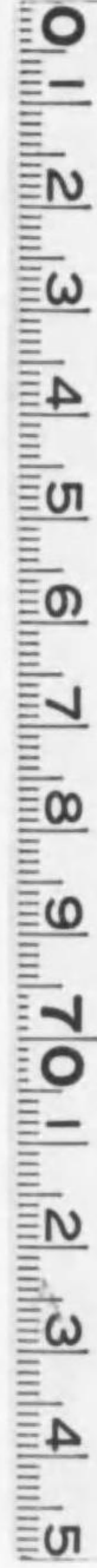


特279-190



冊 279

90



始





骨董集上編下之卷 後

江戸

醒齋輯



○勸進比丘尼繪解 一

水野下にのぞける古画その風林をりて時代を考ふる。寛永の比抄けるものぞ。
勸進比丘尼の繪解とる。体いぞのづた。東海道名所記 浅井了意作 万治中印本 卷二一云

「このころ。比丘尼の伊勢熊野にまゝ。衫をほとめ。よその赤子みる伊勢
熊野よまのる。この故。熊野比丘尼と名づく。其の中。声よく。哥をうそひける
のゆのゆりて。うそひて。勸進一たり。その赤子まゝ。哥をうそひたり。まゝ。熊野
の絵と名づく。地ち。極楽とて。六道乃のり。根を絵よりきて。絵とれたるに。
ち。あつた。ち。ま。女房達。の寺に。ま。う。て。談笑。あ。ん。ど。も。き。く。奉。あ。ら。れ。ば。
後世をきく。ぬ人のために。比丘尼のゆ。され。ち。わ。う。を。も。と。め。たり。ら。ん。あり。
り。乃。留。る。ち。あ。う。う。あ。て。ら。は。世。伊。勢。ま。ま。の。れ。も。行。を。も。と。せ。ど。中。後。と。き。

○古画勸進比丘尼繪解圖

柳塘館摹藏

按此画は今より約百八十年
 前より前曾永中よりける
 法久久一紙を白紙布よそ
 まにたつらふくたあり
 七十一番職人冬
 法を合せりるべし



きりべし

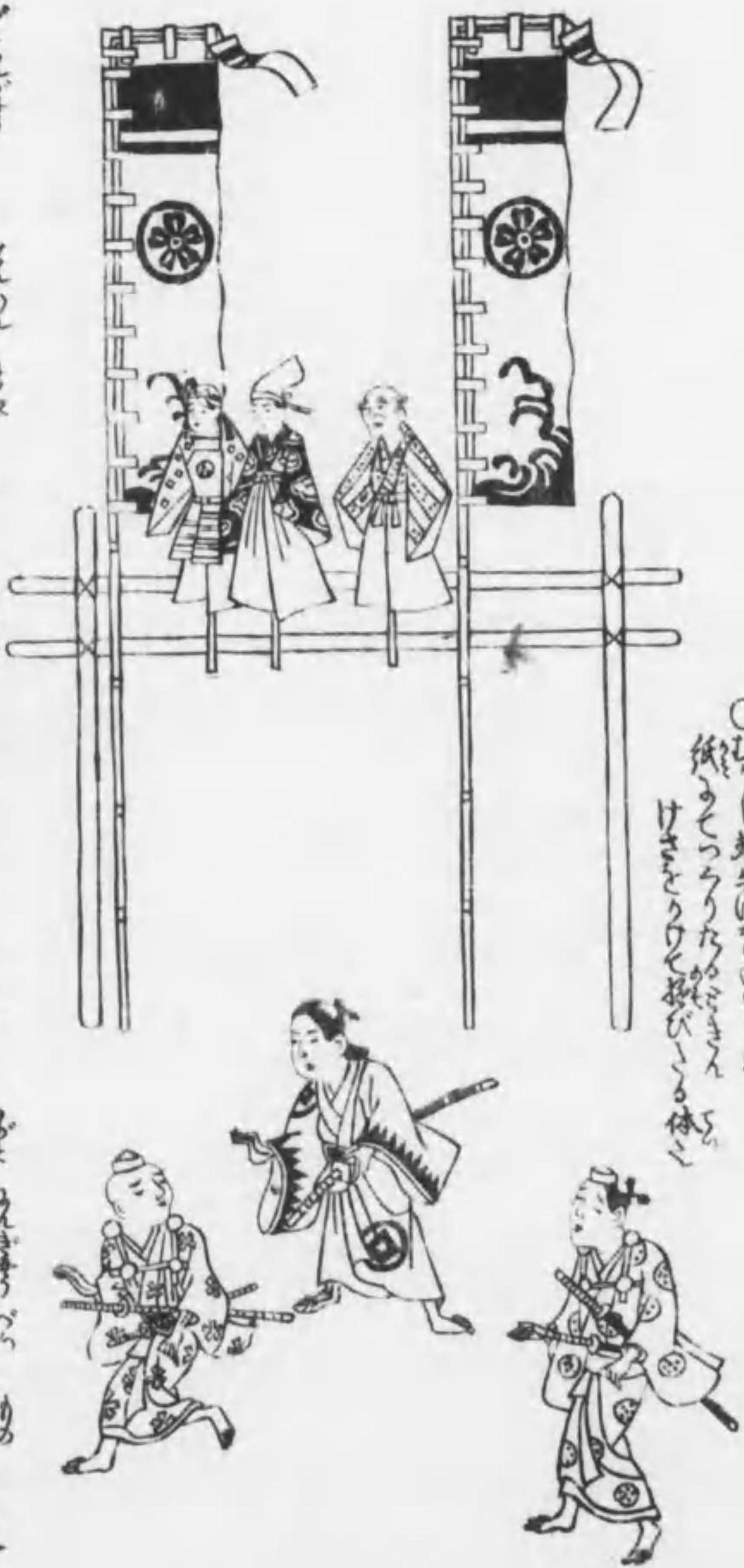
○漢土は五月五日。艾もてちひさき虎をけくまを改よりさくりあり。それを艾虎と
 ぞり。漢籍よあまうそえんたり。和漢相似なるあり。

○端午の頭巾・袈裟・小人形

今より元百二十三年前。延宝天和貞享元祿の比。五月五日男児紙めて造れる
 頭巾・袈裟を着。山伏の体よ出立てて遊び。奉りありき。日次紀事。延宝五月
 五日の條よ云「以柳木作大小刀。是謂菖蒲刀。男児横之
 於腰。著頭巾。倣山伏。跡云云」。雍列府志。貞享前。小川人一家。端
 午所用木刀。或謂菖蒲刀。云又木長刀。木甲。曹山伏
 之頭巾。袈裟。并藥玉。箒物。賣之云云。ひりく物傳。享保十。六七十年
 双あまむら五月の初。とまきん。とまけ。あら。菖蒲刀をうりてありく。それを
 子供求て。五月四日。小子供志。あふまて。碎巻し。とまきをあけり。たときを
 わら。菖蒲刀をさし。わらを吹ありく。云云」とあり。それらを入りてすよ。
 まて下。の古画よりとらあり。今いそれ小なる事なれば。い。

○元禄年中の印本
大和耕作繪抄
卷二小所載の図あり

蔵本



○むらへん端平にそのワケハ
紙のつらうたぬかきん
けささうりてけびるる体

○油印人形のりん先板の巻ふもとり元禄のころかまやうのりくし僧と人形と割のゆきうれり
人形の割の質素をとりて其角か五え集し一々かや傘よつる小人形とゆひし
は後しあるは時代されば人形のゆきうれりそのころと目のまじりたるはしりて
きさらめばしり

○後妻打古図考 四

和名鈔 後妻 和名宇波奈利

新撰守鏡

古事記白
持原富成
字波那理
大和物詠
又梅垣
兼
古言

ういありとら後妻をとり古言と
嫌 宇波奈利 日本紀 卷二 嫉妬の二字をういあり移しと訓り
昔ニ物語 室町家の比のまじりや相当打とりたるゆりりり
とるんういあり打らもひけるうい妻を離別して後の妻をむりへるよ
其あつと小うりて前の妻あつと其女どもをたのめ相当打を催しよる前小後
の妻の方へ使ひをほりて其の日其の時相当打よくべきういをいひり
其日よこれバ前妻をとりめうてあつと女どもおめくあるひきこのの
をりらて後の妻の方へあつき臺所より入て打まる後の妻の方よまじり
女をたのめかきしういとてういといとてさかたひひのうい時前妻後妻
の媒妁せし者の妻と待女郎小るし女と双方の中よりあつとひるたのめ
あつとありたがひに男をまじりある妻のせうりりり

以上
撮要

治承二年
より今文
化十年
まこと
六百三十
六年

○さてお打打の名は... 他...
賣物集 卷二よ云「村上帝の宜耀殿の女御芳子と小一條左大臣の御
娘打戯しとたりきんを覗て御覧しけるが餘小妬思けるやどに九條
右大臣師輔の女御を土器の破りて打給ひけるとぞ聞えしとて御兄
の慶原一條殿伊弉掘河殿兼通三條殿兼家三人あがら所おとまり
小成給ひ小ひりてとぞ聞えしとて増ての下の下子らもの後妻打とるを
とて髪をわらわら取組引組とる理も侍るべき云云」
○此昏ハ俊寛等とともニ疎黃鳥小ありし平判官藤原法所治承二年の春再度旧里
小殿りて後よわけるお此昏よとるあもひききとていなり打のいとふたはひなりん
源平盛衰記 卷一よ云「村上帝の御宇左中将兼家と云人あり北方を三人
持たれハ異名よハ三妻誰と申けり或時此三人の北方一所寄合るが如色
頭とて打合取合髪わらわら衣引破りあんどて見苦しかりければ中将ハ
穴六借とて宿所を捨て出給ぬ取らる者もあて三日まで組合て息つき

弘安六年
より今文化
十年まで
おと五百
三十二年

居たり二人の打合ハ常の事也まて三人あれば誰を敵共あへ向ふを敵と打
合けること嘆けしと云云」
○但し此昏ハとて時代もあつたりたすたりとて二昏とも
狂哥咄 卷二よ云「教月上人とてたかたのび王國
をめぐり地おしけるが筑紫ののりしに女房のうらありとてあひしを
えとよみたる」
○但し此昏ハとて時代もあつたりたすたりとて二昏とも
教月の古くあり沙石集 卷五「三井寺小教月房とて中比碩学有りり
云云」
○此昏ハとて時代もあつたりたすたりとて二昏とも
三井寺小教月坊法橋と云人
あハ如法經を書寫とるごと四十度云云」
右のうらあり打の哥ハ教月のうらありとて哥のあつたりたすたりとて二昏とも
思ひ合とて一〇承久のみとて哥をよみとて命たせり清水寺の住僧ハ東鑑十五歳月
續拾遺集 卷一〇承久のみとて哥をよみとて命たせり清水寺の住僧ハ東鑑十五歳月
古抄きせり月印承鏡月よ作まら右の教月とて別く又狂哥よ名たりし曉月

和名妙
下る
前妻
い女
前妻
い女
和名妙
下る
前妻
い女
前妻
い女



ケツノを髪剪りよりのり。
あぐらのひのハ、
その遺風あり。



山の井
よも又も樽木めと若菜を打を。

貞室が玉海集よ
あつたをこのり木めと
ワウもたぐくは樽木めと若菜を打を。

同書
又いそく「前」のりたる打よ。

古び
後妻
打の妻
画

は女
後妻
ある
べし。
かいらよ
ひをびたる
あぐらのひのハ
のりよりこれあつた
さゆとまがける
あつたよりさる衆の
能の女ののたまふくはつひもと
あつたよりさる衆の
あつたよりさる衆の
あつたよりさる衆の



追如望一後子句ふ
引ありとくくるはのをも
ろ一にとる前句ふ
あつたよりさる衆の
あつたよりさる衆の
あつたよりさる衆の
あつたよりさる衆の
あつたよりさる衆の

〇ちるり打を
えたわつまれる
人のさゆ



武清備書

教坊梨園及小蠻樊素之流所謂古之歌舞妓也。男
服女服。女服。男服。斷髮。爲男髻。橫刀。佩囊。云云。男
相共且歌且踊。此今之歌舞妓也。出雲國。淫婦。九
者始爲之。列國都鄙皆習之。云云。
此又下に「淫婦」の古画

野槌 下之卷 云云 龍飛紀一畧 第一云 元順宗至正十三年中
元主每遊宴以官女十人按舞名爲天魔舞首垂髮

教一舞 戴象牙冠 身被纓絡 云云 近年出雲巫京より多く僧衣を
きて 鈺をうち 佛号を唱へて 始に念仏をうりて 小の伎男の装束

口を横へ 歌舞を 俗より名きと名づけ 此の風俗也 此長ぬらと 怪高と物語
下に胡えの天魔舞の今のあまきになりて 似て 俗に云ふ 中やうに
かくのあまの腰にやううのどきき ぬをたれたらうと 元朝の天魔舞よりやううを
たふに 似たり 怪高先代といふ 和五年より卒せられたり 俗に云ふ 長ぬらと 怪高と
アそけりのやうに 事々しく 明徳と云ふにたれり 俗説并 卷三十三

天慶舞のまを載たり

そのろ物語

寛永十八年印 本吉花園藏

小云 茶よ長乃らるやひ 妙言乃圓

よ小村三女御らとのり人乃むとめり 云云 小の伎男の装束
した拵女ゆひいざ 中畧 此拵女男舞りぶきと名付てうらとみどりく切折
らふよ結うやをを指まのほのほのくこと名付今をうらとみどりく切折
のふまれ回アふらん顔色を双うして 袷をひらば 是れをひきとみどりく切折
まどいせり それをひきとみどりく切折 備圓乃拵女とのあまをまらび 一座の
役者をとらう 兼臺をまらび 拵女とのあまをまらび 一座の
まらびを諸人よらんせらる 云云
此のついでに 下の古画より ありて 〇は拵の巻首より かく
は語二十冊あり せりのワレひが 拵を流をあら たり 云云 愚老田友とれば 女を被るに なる
それ 拵の作老の 茶よ長の時をへて かくうらとみどりく切折の 入りて 人々 かくうらとみどりく切折
それ 拵の作老の 茶よ長の時をへて かくうらとみどりく切折の 入りて 人々 かくうらとみどりく切折
それ 拵の作老の 茶よ長の時をへて かくうらとみどりく切折の 入りて 人々 かくうらとみどりく切折

京童

明曆四年 卷一よ云

そのろくくきとりの 出雲神子の 兼
念佛かりて 後

このころの男の装束もて哥舞とそれをうづらとゆひありきたる
云云 東海道名所記 万治年 卷六云云 むりしく京の歌舞妓のた

まりし出雲神子小あつらふといふるりの五條れびりの橋づめり
やふとどりのといふゆゑとてその後水社の社の東に舞臺とに

らく念仏といふりよ哥をまじりたり差ふられぬのこゝれをまじり息鐘
を首よりして笛つみ小拍子を合せてとどりけりその時の三味線はる

りたあつて三十郎といふる拍子師をまじりけり傳助といふりのを
めらひて三條繩の東のうゝ祇屋の町のうゝろよ舞臺とて

さめぐよ舞臺とて三十郎が舞臺傳助が糸よりとて
これよりうゝされてえおとるあつて六條の傾城所より佐渡嶋といふの

醒云云 佐渡嶋正吉 四條川原よ舞臺をたてしつての舞臺とて
とありけり女をまじりけり 作者の中川春雲より舞臺記より貞室門喜雲中川氏云云

京童の
後編あり没年詳るべしとあり許六が歴代滑音傳より離屋
の画を能く京童と云名所記自画也とあり元禄十五年印本園水が花見車巻二

空圖實文九年九月晦日卒とあり誦諸家譜より實文十二年三月十七日没ス年七十一
とありゆづれり是れをたてしつての舞臺とて

十五六歳よりありけるべし作者長雲が没年つづらるるべし
舞臺記よりたてしつての舞臺とて

六年前本「女張子」巻一義端が序の文より不意大徳晩年よりたてしつての舞臺とて
元禄四年没年つづらるるべしとありけるべし

○和事始巻之一白拍子の備よりたてしつての舞臺とて
とありけるべし

○そのお侍ころに父小村三右衛門とあり東海及名所記よりたてしつての舞臺とて
父もまも三右衛門とありけるべし

歌舞妓事始 一巻よ云「文禄年中依つて於園をたれ哥舞妓を踊らせ
たえ物あり一時水晶の珠数を襟小くけて舞たるをいひんるるこれ水晶の

○慶長年中の繪於國哥舞妓圖

原本梅龍園藏
摸本著作堂藏

○此後三枝あり。
[その時の味線い
まうりきとどるよ
あし合と。]
○うちをもちへうた
をひらきするの[同番
をとんたの持みりさる
かうそる伴あるべし。
つうたんとあづむの
あつたの先板の巻も
あつたがぞろ。
○椅子も尻むけたん
たにが男又拾したる
俄るあし。
羅山先生文集より
髪を
削て男の髪とる
かをこころとる腹を
むふとあるに合ふと
又。
そる物娘よ髪をと



みいりく切りきりきり
よあひきりきりきり
とつらあひきりきり
り又京童よ髪をと
とつらあひきりきり
よあひきりきりきり
あつたがぞろ。
○念珠をこびり
たつらあひきりきり
の親よあひきりきり
紋つけたりもめつら
紐糸の舞い先板の巻
よつらあひきりきり
あつたがぞろ。
○羅山先生文集小
男の女服を脱し
あつたがぞろ。
拾したるに合ふと
と三十郎あつたがぞろ
ひもをとむきりきり
あつたがぞろ。
ハ前よつらあひきり



○このうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。

○此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。
 〇此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。
 〇此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。
 〇此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。



○此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。
 〇此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。

いかにあるべし。

○このうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。
 〇此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。
 〇此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。



○このうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。
 〇此のうらむ髪を倭装と看做りて、まごころを
 らたがねんぶつをどりの作るべし。

○ 編笠を切ぬれたる古図 十



これに似た舞風の装の
 うちたのめりあけり
 風俗と
 考へ
 るに
 實永正保の比の

此の舞奉

此界の
 羽織との異なり此考へ
 別よりの袴の黄土を
 りて被色なり

此の
 靴袴を著
 たる事いふた
 物と見え
 取え

江山堂藏

○ おくしあそび 十一

宇都保物語 初秋の巻よ云「草のあつに笛の音の志ゆるをたがひてあそび

うへ草笛をこそあそびたけれ大將おれあそびを争へりといふとあそびは

云に「菜花物語」ほほもむるの巻長和三年の條よ云「あそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

あそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびはあそびは

治承四年
ヨリ今文
化十年
マデ凡
六百三十
四年と

長門本平家物語 九 卷 治承四年、清盛入道福原よ在て夢よされぬと
あらざりければ事とて所よ入居もまわらざればをよらぬと
人の目くらむをする事よなびよまきもせむとよらまてと
日蓮御書録内 報恩抄の上よ云「慈覚知證と日蓮とが傳教大師の所奉
よ不審申へ親よ値ての年あつそひ天よ値奉ての目くらむよてい
ども云」建治二年七月 太平記 卷十 建武二年十二月十二日箱根竹下合戦
の條よ云「加様よ月くらべして鎌倉よ集り居る叶ま」云

異制庭訓往來 正月七日の消息の中に遊戯の名目をあつて「目比頭引
膝扱云」とつり此層の貞和二年の作あらんと
あつり此層ありて考へ別よあり されらるるつてよらとくらと
しよ事のりらるるつてよらとくらと此事先板の巻よもりれどら
うざればふらびりよ

○宿世焼 十四

異制庭訓 狂戯の名目とあつて「宿世結・宿世焼」といふ名
目あり宿世結は先板の巻よもりらるる今このせの縁結とて宿世
焼の事と考へるよ増補越後名寄 著作 卷三十二よ云「正月十五日左義
長の燃残りの本を宅の炉中よ焼其火よ縁結の齋焼と云事を童
部共よと資の脹よ中よ品形を稱して具ど云」といふこれ宿世焼の遺
意よあらざら縁結のりら焼と稱するよらとあつ

異制庭訓を貞和二年の撰と決ひるとは今文化十年まきもせむと四百六十八年と
古俗とえんむとひのりらとあつたとあつべし

○見え世棚 十五

今の世よ商人の物賣所をたると見え世とあり家の端よ棚閣
をまうけ其上よ万の賣物をあまのりて賣するよらとあつ名あつ
ざりその棚のり物とあまのり往來の人よんせして賣らんためよまう
物られば中古の見世棚といふ後のきよこれの中畧して見え世と

井空集 四の巻も 右の夫木の 哥の垂絹 蛇のまぬ ねたたさ ちとあり 綱林拾葉 とられた あやまち けん

異名分類 蛇のまぬとていふは、巻二の、ひのたれまぬを、
 蛇のまぬの異名とていふは、一時の失うるべし。
 ○醒室のるよ、ひのたれまぬとていふは、ひのたれまぬの絹を、
 頭より、あやひて、山姥を、ひに、蛭を、とて、さし、りん料、よせ、あ、その、あ、
 虫の垂絹とていふは、古画の、牙見、あや、り、下、ひ、さ、せる、古、圖、を、
 哥のむを、考へ、蛇のまぬ、よ、あ、る、を、あ、り、の、べ、り、又、續世継、
 の、ち、ま、の、條、の、大臣、家の、つ、く、人、小、大、進、と、い、る、女、熊、お、ま、の、り、
 道中の、車、を、り、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
 え、さ、り、あ、る、と、の、あ、り、る、が、ひ、ま、ん、野、の、京、よ、り、あ、ま、と、い、ひ、
 と、あ、り、ぬ、と、い、ひ、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
 かん、あ、る、と、い、ふ、系、より、け、り、あ、る、と、い、ふ、系、より、あ、る、と、い、ふ、系、より、
 であ、り、ひ、わ、け、ぬ、と、い、ふ、の、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
 秋、の、ま、つ、り、ん、え、い、る、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
 と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

綱の字 人のこと 字の書 ともと 近 捜索

○伊呂波字類 卷五 雜 綱の字 右の二書 一の誤字 ともあ、り、ぬ、と、い、ひ、
 一木シウと音を 綱の字、右の二書、一の誤字、ともあ、り、ぬ、と、い、ひ、
 玉篇 慧琳音義 龍龕手鑑 字彙 正字通 康熙字典 品字箋 和玉篇
 等を、捜索、せ、れ、ど、い、え、ざ、れ、ば、字、義、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 女笠也とのを考へ、ま、ま、虫、の、た、れ、ま、ぬ、の、い、ふ、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 食服門の「綱」の、い、ふ、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 在肩背也との、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 と、訓、ど、も、虫、の、た、れ、ま、ぬ、の、い、ふ、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 と、れ、ら、よ、合、せ、考、へ、ま、ま、思、ま、ん、と、い、ふ、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 ○宇津保物語 流布の、下、の、樓、上、の、四、人、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 伊、呂、波、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、
 あ、れ、い、童、童、の、た、れ、ま、ぬ、の、あ、り、ぬ、と、い、ひ、

無あつら事まじ分わけ云いくく條じょう少すく云い愛いと小せう誰たれとと不ふ知ち輕けい子こ引ひ兩りゆうのの笠かさ符ふ付つけとと武ぶ者しや
五十餘騎ごじゅうじよき云いくく壙くわう囊なう鈔じょう 文安三年作 卷一第ご五十二條 小兒せうにのの翫物くわんぶつの中なか輪りん子この名目なびもそ
たり同書どうしよ 同卷第どう六十五條 幕まく紋もんの名目なびの中なか輪りん子こ又また輪りん鼓ことあり。

○これらと参考さんかするに伎ぎ藝ぎにもハハ在あるるひて糸いとのの小こ目めハハ一いののり
七十一番職人哥合しちじゅういちばんしやくにんかあのの放下はうかのの若物わかつぶつハハ一いののり
伊呂波字類抄いりやばじゆりいしやう 林邊節用りんぺんしやくじゆう 運歩色業集うんぽしきぎよくじゆ 等ら中ちゆう也や 輪鼓りんこの名目なびもそこれハハ近ちか吉きちまもゆりゆり

○子日こひハハ雜遊ざせう贖物じやくぶつのの比比奈ひひな 十八
宇都保物語うとほものがたり 卷まゝのの二に 太たい宮みやきうきうううまれまれひひて 正月しょうげつニに雪ゆきのの子日こひ 面おも目めハハあ

まゝといひゆる時ときひひおお手てびびふふ糸いと毛けのの車くるま 又また籠かごあけあけけ車くるまをを籠かごあけあけけ
牛うしににひひせせててひひおお人ひとととののせ 金かね湯ゆハハ籠かごあけあけけ 破やぶ子こ 又また馬うまああととちちひひくくは
らりてその馬うまふふひひおお人ひとののせせああららて子日こひのの拵むすべひひののささああととままののびびてて宮みやのの
とああららままひひ一い事ことハハままととり 今いまはは昔むかしのの女をんなののいいちちひひああららままひひのの

あの人ひとののせせででひひおおあありりくくああととこれハハ似にひひつつりりいいああららまま今いまももいいはは拵むすべひひののささ
○圖ずゆゆりりのの卷まきのの下しもももひひおお拵むすべひひのの事ことハハゆゆれれどどそののいいハハ一いととそそらら一いつつ
○つつののささ 詞ことば花はな堂どう主人しゆじんううつつああとと考かうへへたたととされされるる 王おう琴ぎんととままおお拵むすべひひせせりりゆゆとと一いつつ

○江家次第えけしだい 卷まゝ十じゆ 立た太子たいしのの條じょうハハ阿あ末ま加か津つふふととて 比比奈ひひなの名なハハままととり
案あんどどろろふふににいいつつるる 比比奈ひひなハハ今いまのの伽が婢べい子こハハ今いまのの贖物じやくぶつのの人ひと形かたちハハ今いまのの世よににああららままひひて
ああととひひののささののいいハハままととり 今いまのの世よににああららままひひて
のの遺い意いハハままととり 今いまのの世よににああららままひひて
○或古記あひこき 慶長三年三月七日 此こゝのの日ひハハいいちちひひああららままひひのの日ひハハいいちちひひああららままひひのの

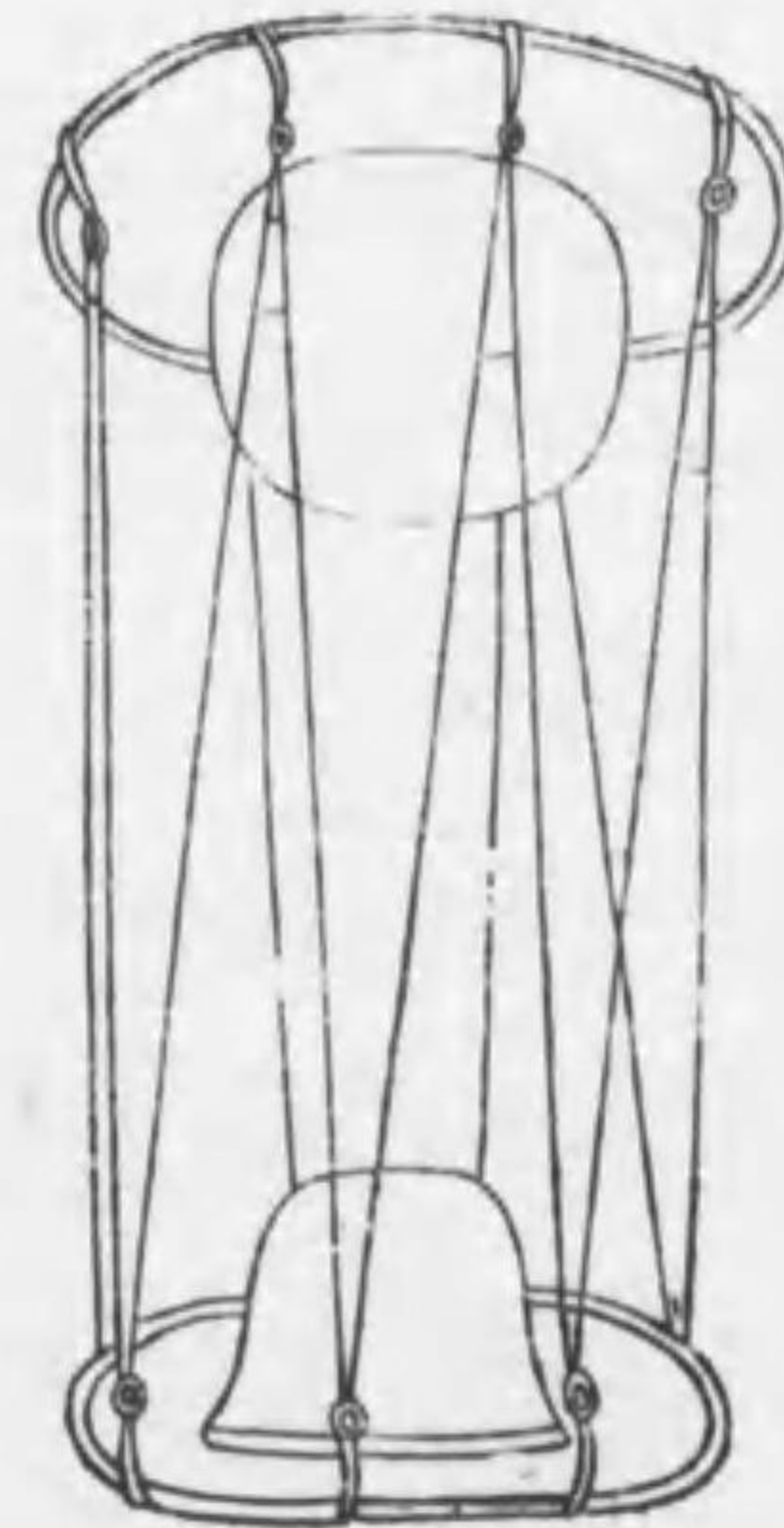
○或古記あひこき 慶長三年三月七日 此こゝのの日ひハハいいちちひひああららままひひのの日ひハハいいちちひひああららままひひのの
必かなら後ちののささののいいハハままととり 今いまのの世よににああららままひひて
上かみ巳み雜ざ進しん云いくく 黒川くろがわ氏うぢのの日ひ次じ紀き事じののささののいいハハままととり 今いまのの世よににああららままひひて
二百廿冊にひゃくにじふにふしありありとといいふふ 日ひ次じ記きののささののいいハハままととり 今いまのの世よににああららままひひて
おおののひひをを 通つう記きののささののいいハハままととり 今いまのの世よににああららままひひて

○海老上臈えいじやうらう 十九
今いまつつののささののいいハハままととり 今いまのの世よににああららままひひて
實文十二年じつぶんじふにねんのの「いうら白はくやや海老上臈えいじやうらう乃なももここがが線せん 正長

○ 紡車



○ 腰鼓圖 暎の玉垢々三才園會 卷三器用三才園會

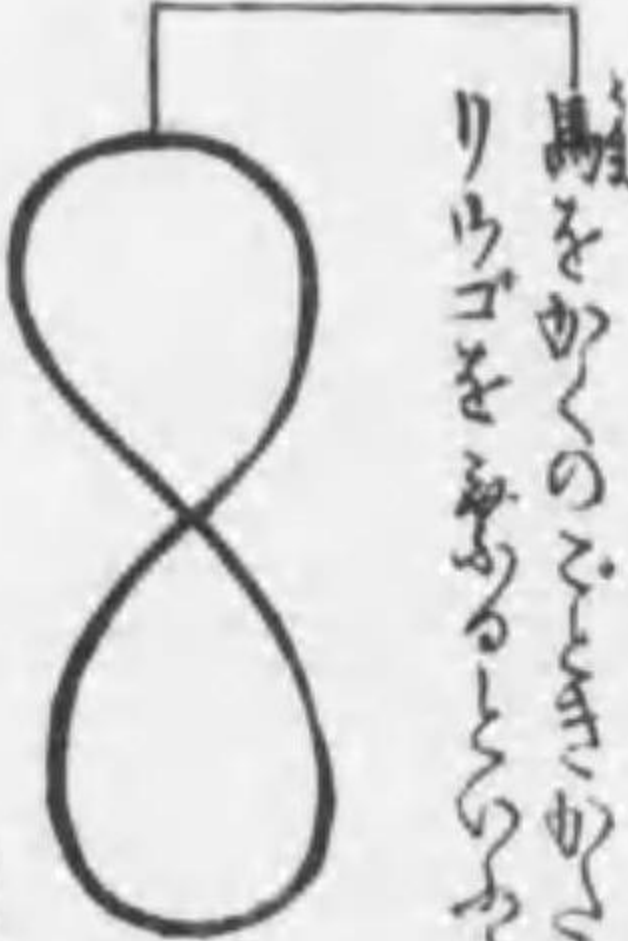


和名抄 *ryūko* の其形細腰鼓の
 似たり。東海道名取記卷四かゝ座鼓。まゝ。
 この宿の名物なり。けや *ryūko* 等。そのたま
 のあり。たまふまふり *ryūko* や *ryūko* 等。たま
 備わりの *ryūko* 小倉 *ryūko* 人 *ryūko* 等
 みてつら *ryūko* 倫 *ryūko* 乃 *ryūko* 等
 故 *ryūko* 万治の *ryūko* 人 *ryūko* 等
 當時 *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等

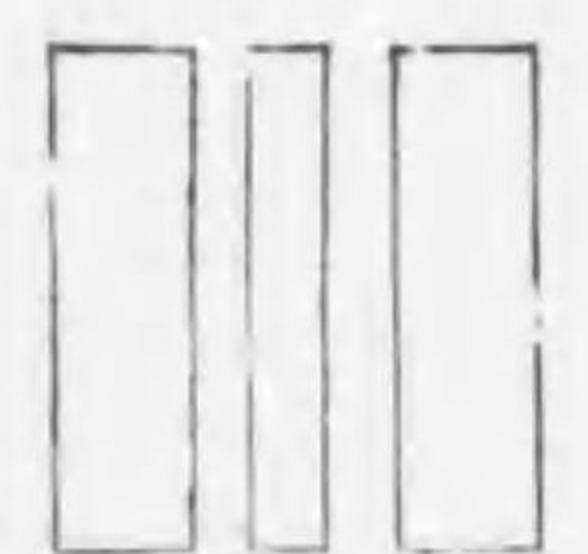
○ 刀の柄一種



端午の菖蒲がまがけ



○ 寛永のころに画中に け園ありまかの文様 リウゴ也



室町家の *ryūko* 見聞諸家紋とのみ
 の *ryūko* の *ryūko* 故を載て
 号 *ryūko* 領あり 大平記の
 軒子 *ryūko* 左右 *ryūko* 等
 中 *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等
 引 *ryūko* 下 *ryūko* 等 *ryūko* 等
 引 *ryūko* 中 *ryūko* 等 *ryūko* 等
ryūko 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等

○ *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等
 機 *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等
 考 *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等



○ *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等
 機 *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等
 考 *ryūko* 等 *ryūko* 等 *ryūko* 等

○腰鼓兄弟 三十

世説補 卷十九 注小南史曰沈懷之三子淡深冲名譽有優劣世號為

腰鼓兄弟抄撮四小唐禮樂志腰鼓廣頭而織腰腰鼓兄弟蓋言伯

季優仲劣也ハ上ハ不レシテ下ノ國ノゴトクニ西頭ハひろク腰ハ細ク其ノ名ハ

細腰鼓ハ上ノ不レシテ下ノ國ノゴトクニ西頭ハひろク腰ハ細ク其ノ名ハ

四十紙右に乾闥婆の細腰鼓あり草稿あり全文を考へて

○わがへ豆腐田樂豆腐上物 三十一

豆腐と壁とのことあり先板の巻小りたどるに引かせ

舉七十一番職人哥合豆腐賣の月は哥小ふらふらふのさたそふら

さうぬまろまら月のもむけざりたる上鵬名事女房こらばとのる條

ふさうぬまろおともむべとも右のさうくはん哥合とあり

○宗長手記 下大永六年十二月の條云此記ハ東山殿のころの事とあり

田樂さうふの盃なひまありて上巻中も抄遊六七人ありて

さりのあり大永六年より今俗説ハ豆腐皮とむべとのハ訛言あり本名ハ

文化十年まで凡二百八十八年うばと其のろ黄やて皺あるが姥の面皮小似たるゆゑの名あり

みどりこもあり異制度訓往來小豆腐上物とあるこそ本名あるたれ豆

腐とほくろたふらふの皮あるをさういへるさういへる畧てさういへる

音便ふはのりと濁つてさういへるよりおられる俗説さういへる

もうとゆと横小のさういへるさういへるさういへるさういへる

○菖蒲曹再考 三十二

延喜式 卷四十一 彈正式云凡金銀薄泥不得為服用并雜器飾但五月

五日諸衛府甲冑之飾不在制限當時五月五日小のさういへる

薄とありハ此遺事欽辨内侍日記 下建長四年五月五日の條云女

序さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

さういへるさういへるさういへるさういへる

建長四年
六十一年
六十三年
六十一年
六十三年
六十一年
六十三年

けしきちたにまゝ弁内侍。

脱字

○建長四年のあやめいあはれとむらひあるかぶらひ
○案に建長四年の御草院内年十の時
○先板の巻ふまゝの御草院内年十の時
○先板の巻ふまゝの御草院内年十の時
○先板の巻ふまゝの御草院内年十の時

○板風呂湯銭風呂屋 三十三

今物語小ある僧... 此物語ハ信實報臣... 此の人ありのわかれ... 此の人ありのわかれ... 此の人ありのわかれ...

○日蓮御書録内 卷三四 金吾小あつれ... 書小... 弟共... 常小... 便の由有べ...

太平記 卷三 延文五年乃

所小 今度の乱ハ併島山入道の所行也... 落書あり... 哥中も讀湯屋風... 呂の女童部までも... 女も...

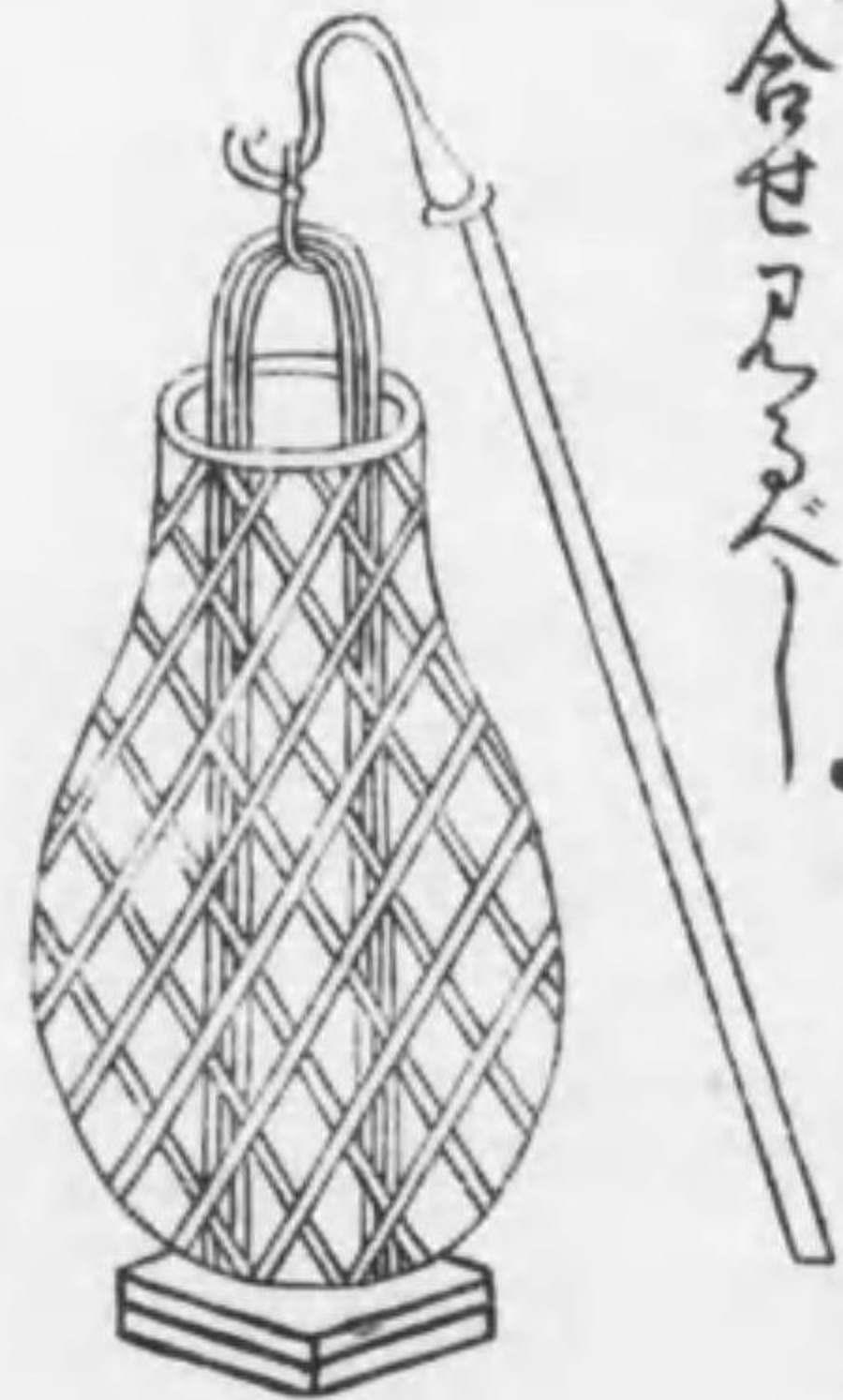
○提燈再考 三十四

朝野群載 卷四 應徳二年十月卅日 法定院佛聖供... 燈油料状... 置佛像之前無挑燈柱云々... 挑燈の字... 燈をアンドン... 行燈をアンドン... 字如何... 挑燈と書て... 行在行者等也... 唐話纂要... 走衆故實... 塵塚物語... 卷五 雷事

とくして所ふ「あらう」西と云れど、ちやうらん鞠の勢ふる火けらるるびも、
 のまじり外へもさぞ、唯くもきり也。とあり。これハ、筆やうらんありあつて、たき形乃
 ちんもあり、これを先板の巻の提灯の條に合せよと云へり。

先板の巻小唐土ふ
 たむちちちん
 あしとくれどな
 ふたむちちちん
 あり俱一紙
 織るこたを

暇の玉圻三才圖會器用
 十二の巻小所載提灯あり。
 先板の巻小いせる蓋ちやう
 らん、此唐制のこたの
 なるみそあふんき。



○行燈再考 二十五

行燈ハ、いと提ありく為し制はる物也。家内ふまを、おの後の事との
 證を、又、山伏道華送行列次第杏花園蔵本との「古書小畧」上、次
 導師先達持槍ツギニウマ次馬次捧物次左右行燈次棺云々無縁雙紙卷尊
 宿茶毘之次第と云る條、一番幡四流左僧持二番行燈四箇右左行

都持云々

累解脱物語 卷下

行燈ハ、いと提ありく為し制はる物也。家内ふまを、おの後の事との
 證を、又、山伏道華送行列次第杏花園蔵本との「古書小畧」上、次
 導師先達持槍ツギニウマ次馬次捧物次左右行燈次棺云々無縁雙紙卷尊
 宿茶毘之次第と云る條、一番幡四流左僧持二番行燈四箇右左行

○古書小畧のちやうらん再考 二十六

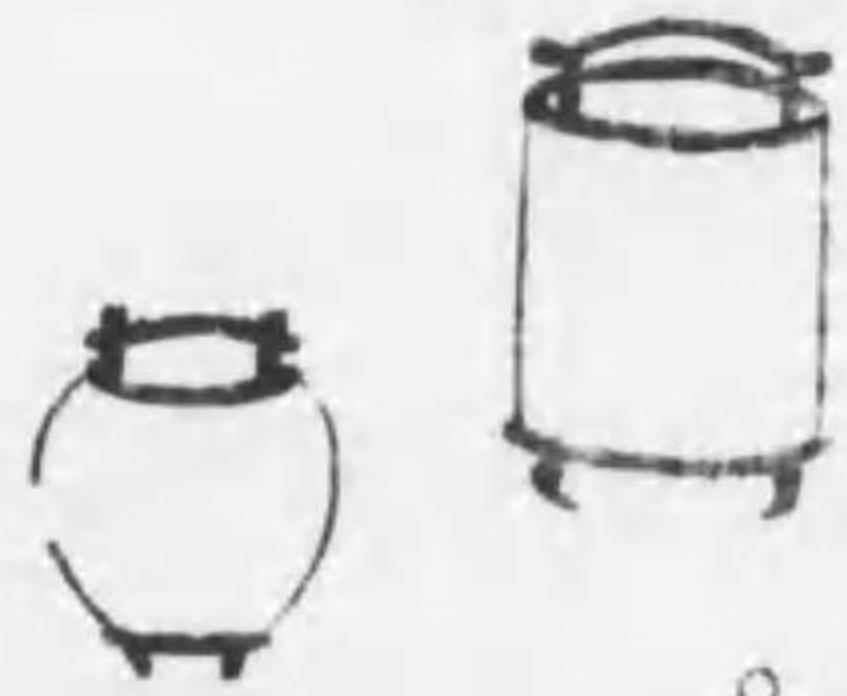
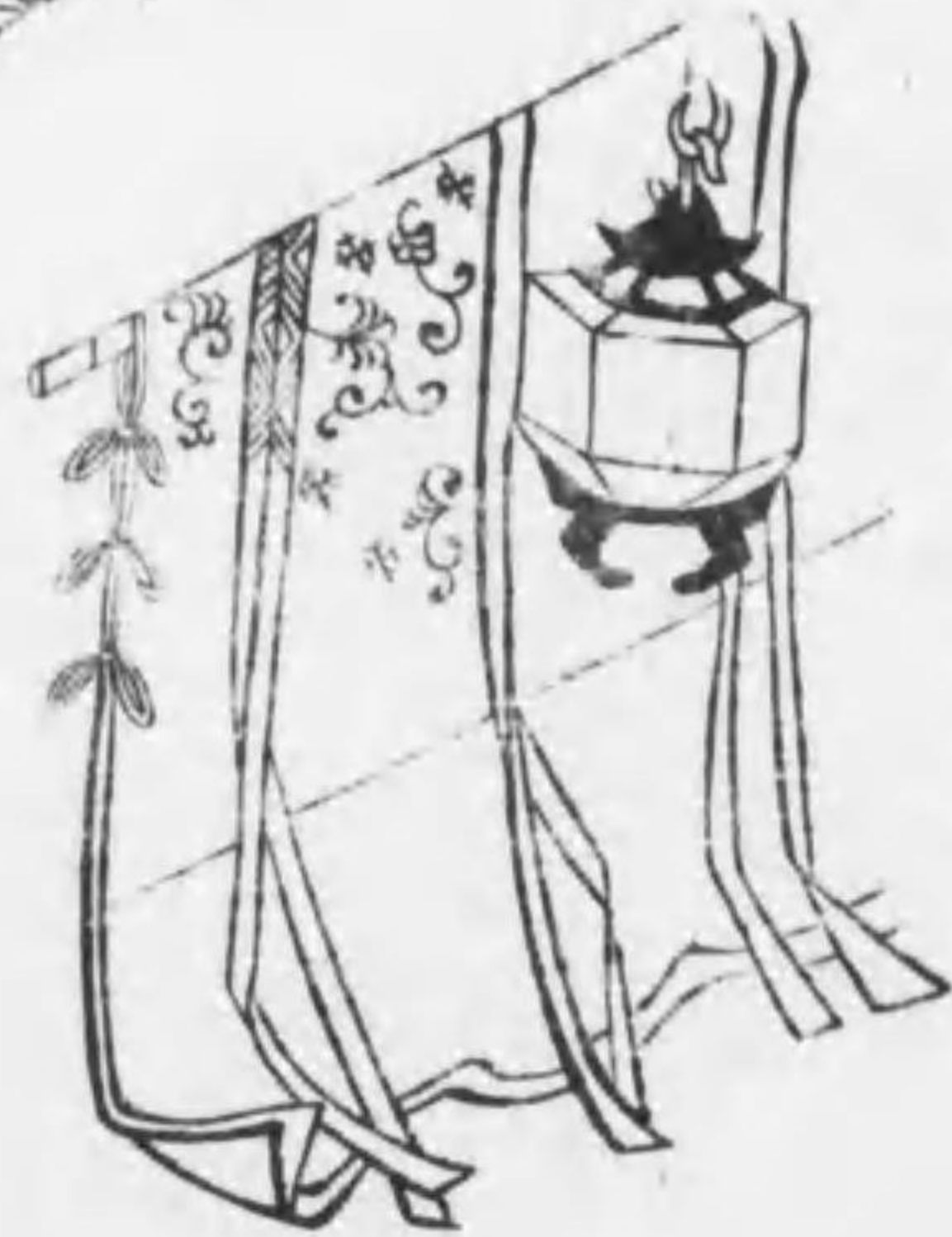
先板の巻小「秋の夜長物語」を引て、古書小畧のちやうらんとあり、魚綾乃
 誤りて綾と云り、挑灯と云るといひ、ハ、おのあてれひごとと云り、古印
 本ハ、きよなるのちやうらん、と假名ふわけ、後小古写本と云れば、魚腦の
 燈炉とあり、これたし、ゆゑ、謹あり、燈炉とありてハ、挑灯の證ハ、古印
 とのへけ、と云ふ、と云く、ハ、挑灯と燈炉ハ、ひと物なり、古印
 本ハ、ちやうらんとあり、後のさうらふ、ハ、ちやうらん、ハ、魚腦の挑
 灯と云へ、唐國の魚腦燈の事、明の田汝成、西湖志餘卷下燈市

○古画行灯挑灯
 ○これの形一（行灯）をばげありきる
 たしきる蓋之今茶人のゆりたる
 露地あんどんといふものに古制の
 のこれるをこれゆてきるべし

古画行灯挑灯

三十七

○りみん挑灯とてきるべし
 はたかひのものをきるべし



○はにん
 あんどん
 きるべし

出書各色華燈中豪家富室則有料絲魚鮓云々
 ハ豪富ふあつたれば得がきこむれば高價のおるべし
 寶貨辨疑 百家
 爾雅十卷釋魚の條下ふ魚枕の事詳之
 本草綱目 卷四魚鮓の條下ふ諸魚
 の腦骨を鮓とてふとあれば古へ此ふ渡りきり
 鮓灯此あて魚腦の灯
 升菴外集 卷九ふ云 江有青魚其
 河南通志 卷十三ふ云 青魚出濟源
 形似鯉而背青色又頭中骨黃拍之可以製器
 打ひらいて灯のあてふはこれるものなりん
 うんくきものにこそあつた 秋の夜もあつた
 かけらもあつたあつた

林逸節用器財門ふ 魚腦石之 桂川地藏記 弘治二上巻ふ 此外魚腦
 檉槐象牙引壺頗黎卮瑠璃壺云々
 魚腦は

魚鮑ゆて寶貨あるよしと云ふべし。

○淮南子卷天文訓云月虚而魚腦減これハ月の十六日以後ハ魚のめがら

王羲之蕪茶帖書記洞詮卷五十一小抄也云石首養食之消成水此魚腦中有

石如菓子これハ魚鮑也胡鬼板胡鬼子毬杖再考三十八

○胡鬼板胡鬼子毬杖再考三十八

年中定例詔正月十一日山附面山附の法形又今日此丘厄厄ハ此丘

慶利兔玖波の注釋ハ是ハ今もいふに今もいふに二三四

○手鞠二十九

今二三四の世ハ正月女のけりハれりてあそぶ手鞠ハのほめ詳ハ冠辞考七瑠比

慶利兔玖波の注釋ハ是ハ今もいふに今もいふに二三四

古事記傳卷二右の説を擧てうけりハ毬ハとハと云ふこと

もあつたあハ醒ハ永正保のころハ今もいふに二三四

平治物語卷上叡山物語の段ハ先一の箱の修禪定の具足の中ハ勢手鞠

許ハて音有物あり云ハ又ハ惡源太為雷事ハの段ハ云ハ只今手鞠許の物

異ハの方より飛つるハ云ハ又ハ惡源太為雷事ハの段ハ云ハ只今手鞠許の物

東鑑卷二貞應二年の條ハ正月二日於若君御方有手鞠御會

四月十三日若君出御南庭有手鞠會ハ同月廿八日若君出御西御

壺有ハ例手鞠會ハ弁内侍日記卷上寛元五年三月

廿三日の條ハ云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

なてまわしせさせ給ひしと云ハ増鏡五うらの雪の條ハ云ハみ

案ずるふ
こた著書
とあるハ
將軍
新經卿
あり
この時
六歳ハ
ありたる
ハ

二
三
本
盛衰記
卷三十四
中編
石鞠
の条ハ
あり

明月記
嘉禄三年
十一月十
九日の
條に
手鞠を
連珠の
甘んば
事と云
たり

とてあつてありませば、そのまはあそびにこそありていとあそび。
 抄政屋さ入りくもの一、後人ばあはひるさあひたまひて、女房乃あうよ
 まし、まはくらんご貝おあひてまより、へんつぎ、あやまの、事どもとおのひく
 小一はく、目とくく、後人ば、ま、
 二小云、禪靴として坐禪の時、眠とさまさん、がたれ小頂、よく手鞠のやう
 ある物を、又巻八小云、或人の女腹中、ふたある手鞠の、まどはて、石の如く堅
 物有云、太平記、卷廿三の、空より、毬の如ある物、光て、叢の中へ、ぞ、落さ
 ける、流布の、印本の、誂、い、お、あ、つ、ち、ま、ま、お、あ、つ、れ、と、太平記音義の、
 消息、小云、手鞠、鞠、打、是、可、被、張、行、也、遊学、往、来、卷、上、正、月、の、童、遊、ハ、の、名、
 目、小、性、之、托、云、獨、楽、也、拍、毬、石、子、云、く、これ、ら、も、正、明、と、て、尺、素、往、来、文、明、の、
 小云、面、偶、内、合、合、之、次、圍、基、將、基、雙、六、下、祐、揚、弓、も、鞠、亦、終、日、て、張、
 行、中、い、か、れ、ば、室、町、家、の、こ、ろ、ま、で、も、會、い、て、ま、り、は、は、く、こ、と、あ、り、
 あり、と、い、ふ、こ、ろ、に、い、え、る、い、ま、あ、り、と、い、ふ、こ、ろ、に、い、え、る、い、ま、あ、り、と、い、ふ、こ、ろ、に、い、え、る、い、ま、あ、り、

天保舊

○これハ文祿慶長のころに繪ある一
 時代の考へ別ありむ、ハかゝのこゝ
 手鞠とほく、なま、く、つ、ま、り、と、い、ふ、こ、ろ、に、い、え、る、い、ま、あ、り、と、い、ふ、こ、ろ、に、い、え、る、い、ま、あ、り、



當時の画、
 慶安二年の印本
 尤之双紙、上巻、小三、物
 織、ふ、く、ら、ん、と、あ、る、ハ、こ、れ、あ、る、ん

これい前ふりさへ
 ちかきまじりのぬま
 たるくさとおあ
 屏風の繪こ
 寛永正保のころ
 りのまじり



京山人物掛巻(百)

東鑑のころに注せらるのふ手鞠と手毬會ハ打毬のまじり
 りいころ異制度訓ふ手鞠打とありて二種のゆとせりや手鞠會ハ
 打毬ありふりころりちまじり

此古画とて手鞠
 ほくろと蹴鞠と
 うつれりてあると
 考へおのり
 東鑑ふ手鞠會と
 りいころ
 今も田舎
 あり五人
 十人會と
 ありて
 はくろ

ちやせん髪
 くんど別ふり
 中編ふり



江山堂所藏

たるものちかまをどつりめし人の質素のあざうりばるるまきののちればいさう考つてくらそ
 ぬきのせり。前の條よ合せんべい。

攝陽郡談 卷十六 小野 姫此

住吉郡 遠里 小野の田圃小作り
 所これ市店ふ出を多ハ埒道
 あり。大さ鷲の卵のこころ。色
 きらめて白く。おとめて人の面を
 画がきそ。幼童の顔とんあひひた
 黄の色あきもあり。黄白ともふ
 美麗とてなれて艶ま。形を
 以て号し。とつり。此書ハ
 元禄十四年印行せり。

○八月朔日 姫此雛圖



○九月九日 髪苜蓿子圖



○桑名とつりあてハ
 ひのあ草を
 かづら草と
 いやとぞ



伊勢桑名
 公羽麻呂寫真

○中編前帙二卷標目

- 花むすひの考 ○唐土の鞆子ハ此の初子れ子ゆ似たる事 ○魚ととくとの再考
- きりと灯籠の考 ○獨樂の考同古圖とさぐ ○梓現寄絃口寄の考同
- 古圖 ○編笠の考古圖とさぐ ○端午れかざり花五月まの考同古圖
- 宗任ガ梅花の哥の考 ○朝夷名ガ鶴の紋の考 ○藤の考 ○編木摺門説
- 經の考同古圖 ○放下僧さまりこあやあそあや竹の考同古圖 ○千駄櫃
- の商人の古圖 ○せんと物賣の考同古圖 ○茶筌髪三里紙の考 ○女の髪
- の風古圖とさぐ ○そんと物并ふ文字入の文様の考古圖とさぐ ○目黒の
- りら花の再考 ○いしやどりふふ ○棚機の牛馬 ○屁おひ比丘尼 ○踊
- の古圖とさぐ ○蠟燭 ○若衆哥舞妓れ古圖 ○皿屋敷の考 ○手管と
- いし詞ののこ ○枕久塚の考 同書進 ○祇園棍女の肖像 ○友禪漆の

考 此外あまこあれとさぐ

追加 望一千句辨抄 辨抄のひやくちゅうりわけ打とこれとの前句に 辨抄は元暦のりての後述と注行
 たり。これらもうらみあり打の一元とせよ。 誹諧家譜と云ふ杉田翁當堂一八寛永七年六月二日
 没せり。行年八十三ありき。これ小まふ六天文十九年の生れ也。いまうらみあり打のたをさる時をた。此外
 うらみあり打は 鑑鏡のこゝにせり。うらみあり打のたをさる時をた。又寛永十八年。帆亭
 徳元が著せる 誹諧初学抄 翁の洞ふらみあり打をいせり。 誹諧家譜 仙臺比呂殿 坂とのみ丸にて
 ひくに坂法ともわけり。時島 松山 珍世とあり。これびくたの法と云ふ。いさうのうらみあり打の撰之
 〇〇〇を龍のそれの奈小合せと云ふ。

江戸 醒齋老人 著 京傳

備書 島岡長盈
 同 凡例目六下之卷末自 藍庭林信
 井四紙至卅六紙 名古屋治平
 別人 朝倉吉次郎

加減朱子讀書丸

二包 一氣んとほよくおかげえとよくい。心賢のきこふんをわきま
 一友五分 一友五分 生れつきとく多病の人用と云ふ。 老若男女小習と云ふ。 小習を
 はらふとわたりて心をつる人ハおのづから病をまゝして天壽をととる人よりよくいふ。 仙臺比呂殿の撰之
 後小たりて益多し。 つる。 仙臺比呂殿の撰之。 一程を所談あり。 江戸京橋南 山東老店
 印章篆刻 玉石銅印古体造作ゆゑふ應と。 石上刻一字 京山人百樹
 女大刻一字 朱文七か白文九か大印八此限りのり

東京神田區神田雉子町
 三十壹番地
 書肆 寛裕舎
 各書林

終

